【詩集】かんりん

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【詩集】かんりん

【Ｎコード】
Ｎ２１６７Ｙ

【作者名】
布袋しぐれ

【あらすじ】
布袋しぐれの詩集、第二弾、『かんりん』

作品名は生まれの季語から頂きました。

感じるままに

広がってゆく

世界

空っ風の

ぞうぞうと
新たな歩みを
始めよと
風が鳴く
空が歌う
そうして
揺られる葉が
私に問いかける

お前はどこへ行きたいのか
お前はなにになりたいのか

そう問われて
私は少し躊躇して
きっと
自信を持って
答えた
少し小さな声にならない
声で

私は私の野望を果たしたい
抱いていた夢を叶えたい

時はきたり
チャンスもなにもかも
我が手中にあり
何も恐れることはない
きっと
憂うこともない
このまま突き進めばいい
私らしく
力強く
歩み続けることを
恐れるなと

私はそう
いわれた気がするのだ

からだ

今日のからだは好きだな
ここの厚さが気に入らないな
でもこの部分のこの触り心地は好きかも

毎日のように
鏡の前で
自分のウエストと格闘する

モデルみたいに
薄いウエストじゃないし
アイドルみたいに
キレイにくびれてる
ウエストじゃないから

憧れは強い
自制心はチョット弱め
意識は強いけれど
憧れは時々
チョット弱め

ここのこの感じ好きじゃない
あんまり揺れてて形が悪い
気に入らないな

毎日のように
見下ろして
他人と比べる脚

最近流行りの歌手みたいに
ほっそり素敵な脚じゃない
今頃の人みたいに長めな
人形美脚でもない

思いは強くて
憧れも強くて
理想は高めな
わがままな
私にひっつく
現実ボディ
これはこれでいい
そう思える日がくるのだろうか

充実感

疲れてて
疲労もたまって
いっぱいいっぱいで
だらしなく
だらっとしたくなるくらい
起き上がりたくなくなるくらい
それくらい疲れると
なんだか
満たされているなあって
そう感じる
最近
そう思うようになった

歳を重ねてきたせいなのか
どうだか分からないが
満たされた感じが味わえるというのは
実に幸せだと思える

虚しさも
日々の生活で
混沌と
忙しい
辛い
疲れた
痛い

そういう
全て乗り越えられれば
それが充実感にやがて変わることを
私は知っているつもり
幸せ
これは幸せ
そしてこれは充実感
きっと満たされている証拠だって
私は分かる気がする

ふと

短い
その一瞬
その瞬間
いっときだけ
短いそのときだけ
不意に
寂しさに駆られて
ひとりだと
痛いほど
この胸に刺さる言葉がある

届きませんか
届けられませんか
届かなくてもいい
眠ったままの想いでいい
あなたに向けた
その視線ひとつ
枯れることもなく
衰えることもない
ひかりを宿して

一夜限りの恋でも
いっそう
構わないと思った

私は誑(たぶら)かしたつもりはないのに
周りはそういう
愛がないと生きていけないのはきっと
皆同じはずなのに
私は道を踏み外したみたいに
思いもまるで一瞬で
軽いみたいに

そうじゃない
一生懸命に愛しても
返ってこない感情なんて
ほしい反応がほしいだけで
ほしいものはほしい
まるで駄々こねる
赤子のようね
そういわれても仕方ないから
私は思い焦がれた
理想の形の愛がほしくなるの

一夜限りでもいい
まるで女郎かなんかみたいに
軽い
安っぽい愛でも構わないと思う
あなたが一瞬でも
私のために存在して
私だけを見て
私だけのために囁いてくれるのならば

声

聞きたい声がある
抱きしめてほしいくらい
聞いてみたい
偶像みたいな声がある

幻なのだろうか
文字のおこりから
あなたの声がするみたい

優しく深く響く声は
温かく
冷たく
そうして
ぼんやりと
染み渡る

あなたの声がすき
あなたの声が聞いてみたい
あなたはどんな声なの

形いっぱい
温かさも違って

ああ
恋も多い私だから
こうやって少しの破片にも
恋しちゃうんだろうね

ああ
愛おしい
懐かしいみたいに
よく響く

恋しちゃったんだろうね
あなたの
聞こえない
声に

マイナス

やめたいなって
ふと思う
そういう瞬間が
あったりして

目の前のことに集中したいって
思ったりする
ああ
案外、ちっぽけだったって
どうしようもできないって

なんだろう
あべこべだけれど
そう考えてしまう瞬間がある

リセットしたい
新しい自分に出くわしてみたい

私は次のとき
どうなるんだろうか

新しい刺激を求めるために

この瞬間を生きて

それはプラスに向うための
マイナスからの脱却
きっと
そう

マイナスは今のためにある
ブルーな気持ち
ただそれにすぎない

憂鬱
心が頭が
深いブルーに占められて
温かさも
何もかも
失っていくみたいに

これがマイナスの世界なんだろうな
ぼやっと
そう感じて

一生懸命であることが
少し
面倒になる

キリリ

空っぽだった胃に
モノが流れ込む
加減もなく
たっぷりと

たぷっと
波打つ
胃の中
途端にキリリと痛み出す

優しくないな
この食べ物は

口に含むことを
少し躊躇する
食べたくない
胃が痛い
それだけだけれど
かなりの打撃

痛い
痛い
食事をしたことを後悔した

食事をしていないほうが
マシだと思った
胃のせり上がりとか
そういうのが辛い

どうして食べなくてはいけないの
どうして太ってしまうの

遺伝子の悩みって
一種
尽きないところがあると思う

何を食べても太る人と
何を食べても太らない人って
生きる道も違ってしまう
苦しいものだなあ

生きるため
食べて
苦しむんだろうな

正義

誰が正しいか
誰が良い人か
分からなくなった
この時代に

清く正しく
真っ直ぐに
そう生きるだけが
術じゃないと
悪人が詠うようだ

正しく生きれば
自分だけが損をするかもしれない
そういう世の中だから

騙すのも騙されるのも
ひとえに運命だと
そう悪人が言うようだ

正義を詠ったのは
いつの日か
正義だけが正しくないと
そう思えたのは

いつの日からか

正義を過信するな
そう言いたげなのは
悪人か善人か

正義は最早
英雄ではない

少なくとも人は
これからを
正義のみにかけて
生きれないという
揺ぎない
世の中の裏腹な事実に
苦しむのだろう

あなた一色

こんなに早く
掌返すように
感情も変わるなんて
思わなかった
こんな自分
知らなかった
私らしくもない
もうすっかり薄れた感覚
白く
清く
キレイでいること

思っていた以上に
私は汚れていて
頭の中で
必死に駆け引きして
振り向かせようと
まるで一生懸命
全てを賭けた様に
元の自分は全て押し殺して
何も
少しも
振り向かないあなたに苛立って

いつからか

この感情が
単なる高鳴りと
期待と
憧れから
素直な恋心へ
相手にされないと
知っていても
私は
諦められなかったみたい
あなたの袖を握る
他の大人の女性が
羨ましかった

きっと
大人をからかってはいけないとか
そういって
相手になんかしてくれないのだろうに
私の心も知らないで
あなたがどんどん
この頭を支配していく

お馬鹿ちゃん

あなたなんかに言われたくないよ
後ろ指差してる余裕あるの
私があなたより
劣っているなんて
可笑しな話
馬鹿げた話

あなたのものさしで
はからないで
あなたの目はこれっぽっちも
正しくなんかないんだから

お馬鹿ちゃん
悲しいお馬鹿ちゃん

うぬぼれるなって
どの口が吐いたの
うぬぼれているのは
寧ろあなたのほう
何者のつもりなの
可笑しな話
馬鹿げた話

侮辱する暇があったら
少しはその脳を鍛えてみてよ
あなたは馬鹿らしくって
嫌気もさすの

お馬鹿ちゃん
哀れなお馬鹿ちゃん

この私の人生は
この私のためだけにある
どう転がそうと
どう歩もうと
何人とも
邪魔なんて出来ない
自由でいいの
私らしくあっていいの

お馬鹿ちゃん
大きなお馬鹿ちゃん

邪魔なんてしないで下さる

微笑み

まるで
絵本の中の皇子様ね
あなたの微笑み
柔らかく
純粋で

大人のクセに
そう言いたくなるほど
温かい
笑い方している

どうせなら
そう言いたくなるほど
出会いの遅さ
少し悔やみたくなるの

いっそうのこと
そう思わずにはいられないくらい
私の幼さ
悔やんでいるの

きっと子供だからって
きっといつものことだからって

あんまり相手にしてないでしょ

憧れの皇子様
こんな近くに
生きていたなんて
知らなかった
想像できなかった

絵本の中が現実になって
私は少し
夢見てる
シンデレラみたいに
あなたの笑顔に
少しの間
癒されて

あなたと出会い
気付いた感情
もうきっと
笑顔が怖いだなんて
思わない

あなたが与えてくれた勇気を
もう持っているから

あなたが私にくれたものは
とても大きな
素敵な感情

震える

魂が泣くみたいに
まるで赤子に戻ったかのように

耳から伝う
伸びのある
きれいな音を
聴いていると
身体のどこかで
魂が鼓動する

ドクンドクン
ドクンドクン
温かな熱を持って
全身にぱっと広がる
一種のエクスタシー
これぞ
本当の悦楽だと
歌声が
身体の中で跳ね返る

温かな意思をもった声は
まるで魔法のように
ぱあっと広がってゆく
馴染んでゆく

いつまでも耳に残るサウンド
幸せなサウンド
魂を抱く
そのサウンドが
鳴り響く限り
その震えはとまらない
とめられない

墜ちない

ちょっと突けば
墜ちるって
ちょっと声をかければ
何でものってくれるって
勘違いしていない　君は

勘違いしないで
そんなに安くないわ
簡単じゃないの

私を手に入れるまで
必要な　マナーと言葉選び
時間をかけてゆっくり
この間の溝を解いてみて
簡単なことよ
多分

ちょっと関係をもって
おいしいとこだけ
ちょっと囁けられれば
あなたのものになるって
勘違いしているでしょう　君も

勘違いしないで
誰でもいいわけじゃない
何度も言わせないで

私が誰に似てるって
馬鹿にしないでよ
愚弄しないで
私は私
似てるなんてあり得ない
誰でもなく
間違いなく
この私は私

私は私の作法を持って
定理を持って
人を選ぶ
仕掛けられたトラップに
はまり込むほど
馬鹿じゃないわ

幸せ

人として認められたり
求められたり
それって些細なことの積み重ねだけれど
その些細なことが
ほんのわずか
色のない日常に
色を添える

素敵だと思えること
キレイだと感じれる心
それがあって日常がやっと輝きだして
味気のない日々だけれど
そういう小さなことに
心動かされることから
始まったりする

愛したり愛されたり
人間として大切なものを
味わえる日常にいれるから
随分幸せだと感じることもできる
満たされているってとても立派で
とても素敵なことなんだ

小さな事実に驚いて
それでいて
素敵だと気付く

小さなひとつひとつ
些細なひとつひとつに
心動けば
それだけで
幸せだと思えたら
最高だろう

苦しい

痛い苦しい
驚くほど

自分でも
どうしてこんなになっちゃったのか
分からないくらい
苦しい

胸の奥がとても痛いよ
今までにないくらい

どうしてこんなに苦しいのか
分からないけれど
そうやって
誤解されることも
嘘で塗り固められていく
仮の私に嘆くのも
疲れたし
苦しいし
とてもいいことなんて
ありはしなかったよ

どうして傷つけるの

勝手な想像でまとめちゃうの
苦しいのよ
逃れられない
こんな偶像から
私は逃げられないのに
酷い話ね
こうやって苦しめて
笑っているなんて

馬鹿にしないでよ
笑わないでよ
後ろ指なんて差さないで
本当の私は
嘘で塗り固めないと
立ってられない位
弱虫なんだから
しり込みしているんだから

そんな偶像をつくらせた
私の隙が
今はただ
悔しいの

メール

もう
普通の友達だけれど
やっぱり
あなたは
とても良い男(ひと)だなって
そう感じてる

いつも優しくて
少し前を
ゆっくり歩くみたいな
あなた

感じている
その優しさ
溢れんばかりに
あなたが母のように言われること
いい加減気付きなよ
優しすぎるほど

惚れっぽくなくっても
一途じゃなくっても
慎重に深く
大切に
人を愛すること

あなたが半分教えていったこと
あなたがその手で
教えてくれたこと

あなたにフラれたこと
きっと後悔しないけれど
あなたの傍にそう
長くいれないことが
少し苦しいのよ
愛しているわけじゃないけれど
あなたという
素敵なひとりの男性に
寄りかかれないことが
少し苦しいだけよ

あなたに良く似た
優しい人に
少しばかり
今も惹かれて

来る
来ない
そんな返信を
少し心待ちにして

あなた

幸せだよ
あなたと出会えたことが
幸せだよ
あなたと話せることが
幸せだよ
こんなに日常が満たされていることが

苦しいこと
辛いこと
嫌なこと
そして
乗り越えたくない
面倒なことも

すべて
あなたが
充実感に変えてくれる
変えてくれた

あなたと出会えて
変われました

人と接するのも

初対面で話すのも
人と触れ合うこと
全然
怖くないし
脅える必要もないんだって
あなたが教えてくれた

噂に振り回されて
また不安に
不信感に陥ったときも
あなたが
話を聞いて
あなたが
真剣に考えてくれました
消せない
あなたからの
アドバイスのメール

些細な優しさも
強制的なコミュニケーションも
なにもかも
慣れないころは
迷惑だなんて
感じてたけれど

今は
あなたのおかげで

あなたに支えられて
また
笑うことができています

ありがとう
大切なあなた

脅え

誰かが
私の話をしている気がして
耳を塞ぎたくなる

強気な私はどこかへ
消えうせ
今ある私は
まるで過去の私

噂に脅え
笑える姿だわ

強気でいようと気をつけても
精神は正直
気が立って
眠れやしない

どんどん
思う壺ね
どんどん
はまっていって
どんどん
夜は更けるのに

私はうとうとして
また
目が覚めるのよ

ああ
思い過ごしなら良いのに
ああ
辛いのは気のせい
思い過ごし
全て夢だと
脅える必要はないと
誰か言って
これが被害妄想であると
誰か
言って

このままじゃ
脅えに呑まれて
可笑しくなりそう

理想への道

崇高な
僧の
崇高な
理想があった

その伝記に
目を通すとき
我の
目映かしき
未来に
思いを馳せる

何かを
しなくてはならないのではないかと
重大な
何かを
しなくてはならないのではないのだろうかと
考えても
みるのだ

崇高なる
偉人の
崇高なる
伝記に目を通せば

成した業の
大きさの
分かるものよ
偉大なる
人は
偉大なる人生を歩んでいるわけではない
偉大な人生を開拓したのだ

理想を描くために
自らの生活を
開拓していくしかない
開拓するべきなのである

夢への一歩を歩まんとす

私とあなた

あなたの前へ出たい
一歩踏み出して
あなたの前へ

まるで花嫁の候補のように
一歩前へ
あなたから
契約の輪をもらうことを
恋焦がれる
誰もが願っているの

お姉さまには叶わない
私はまだ子供だろうから
あなたが相手にしてくれなかったら
私がまだ子供の証拠よ

あなたの横にいたい
一歩踏み出して
あなたの横へ

まるで親しい友人のように
最初はそうで良い
一歩前へ

そうして横へ並んで
一緒に笑って
一緒に話して
あなたに焦がれる
誰もが
きっとそれを望んでる

あなたに憧れている人は多いのよ
きっと
あなたがその気になれば
ごまんと
出てくるでしょうね

諦めがちな恋
この恋が
多分
最後かもしれないと
頭のどこかで願っていて
頭のどこかで
既に諦めているの

また

存在しないというのに
あなた
また中(あ)てられたみたいね
わたし
まるで毒のような
あなたの魅力を
一瞬限りと
拒めないわ

この世にはない
完璧さで
わたしを魅了して止まないのよ
あなた
素敵なあなた

強い剣に
意思を携え
今の世の中
蔓延(はびこ)る悪が
そんな素晴らしい
素敵な強さを忘れさせ
廃れさせる

愛してあなた

返ってこない言葉も
存在すらしないあなたも
一瞬とはいえど
極上の夢を見させるの

この世の中
いいことばかりじゃない
苦しいことも
何もかも
苦すぎる
辛すぎる
そんな風だから
一瞬
目を閉じて
居もしない
届きもしない
現実の皇子様じゃなくって
あなたに思いを馳せるの

寂しいね
悲しいね
虚しいねってひとり
あなたを思う
わたしの姿が
何より滑稽でないかと
心配で
どこかで冷静に憂いているのよ

またあなたの魅力を
感じるその日まで

これは多分

ぐるぐる
回る視界
ぐるぐる
まるで３６０度
乗り心地の悪い
ジェットコースターに
のった気分
あんまり気分は
いいモンじゃない

ぐるぐる
回る感覚
ぐるぐる
見ている視界も回ってる
これは床も
回ってるんじゃないかと
疑ってしまう
あんまり視界は
面白いモンじゃない

ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる
気分も悪くなってきて
寝返り打っただけで

それだけで
すでに
ぐるぐるぐるぐる
耐えられないわけじゃないけれど
これは辛すぎるってモン
ナンだこれは

これって
多分
貧血だ

これは多分（後書き）

貧血になっちゃいました・・・またまた、久しぶりに・・・うーん・・・
回復したけれど、気分悪いかも。

狂う世界

おかしなことを喋っている
無責任な政治家がいる
頭の中はきっと空っぽ
誰かがそうやって毒づく
それでも世の中は
ちゃんと機能していて

誰かが傷つき
誰かが喜ぶ
他人の不幸なんて
ちっぽけなその優越感のために在るの
聞きたいよ　一体誰が
そんな無責任で身勝手なことを言ったの

おかしすぎる
この世だから
もう少しだけ　夢みてたいよ

あと少し眠って
夢の中で
幸せ抱きしめて
あなたに会えない日も
そうやって
耐えて

現実は辛い
きっと辛い
逃げたくもなる
だけれど
歩まなくては
人ではいられないから

あと少しだけ眠って
夢の中で
あるがまま抱きしめて
何かに耐えかねたそんな日々も
忘れさせて
一瞬
いつも通り
そんな通り
そんなのないから
目を覚ましたまま
おかしな
この世界に振り回される

そんな一瞬
少し忘れて

狂っていく
この世界の
歯止めきかない
だからせめて

夢でもみて
息抜きするの

重なる苦悩

噂にこんなに
悩まされるなんて
多分
こんな苦労
知らなかったよ

何もかもがダメになって
変なとこばっかり
流布していって
おかしな
現実
おかしな
態度
あの人はそんな人だったっけ

メンタルでは
ちゃんと頑張ってるつもり
でも
ときどき
くらっとするの
ちょっとばかし
この私も参ってるみたいね
馬鹿馬鹿しい
あんなくだらない連中の
あんなくだらない話に

振り回されるなんて

私ではないだろう
いや
私だろうか
昔から
嫌味も
悪口も
陰口も
叩かれまくったせいか
感覚は麻痺して
悪口は全て自分に対するもの
そういう錯覚は拭えない
この恐怖心から
解き放たれる日は
くるのだろうか
私には一生見えてこない気がする

不名誉な噂に
虚偽のレッテル
おかしな視線に
全て失ったわ
何もかも
仲良く行っていたはずよ

お前のせいだって
一層のこと

いえてしまえたら良いのにね
どう償ってくれるつもりなの
その低俗な頭で

私の幸せな日常を返してよ
汚らわしい下衆が

あなたの影

まぶたの裏
ちらつく
ありもしない
あなたの影

こんなに恋しいなんて
会えてたときは
気にも留めずに

こんなに近い距離にいるのに
どうして
会う術もないんだろう

車で二時間ちょっと
あなたがいるかも
しれないところへ
たどり着けるのに

時が残酷に流れて
いつか
あなたが
赤い糸で
誰か素敵な女性と

結ばれるなんて

私は望めないの
そんな現実を
拒んだままでいていい
私が望むのは

ありもしない影を
私は望んでいる
居もしない場所で
似た服着た人を
ありえないほど
切実に影
重ね合わせて
好きだよ　好きだよって
叫べたらいいのに
あなたの視線だけは
私に向けてほしい

望めない
不自然なエンド
恋人がほしいって
あなたの口から
聞きたくはないよ
ずっと
ずっと
ずっと私の

片思いの
幸せを味わわせて
お願いだから

ありもしない
あなたの影
まぶたの裏に
焼きついて離れない

うつむき

こんな自分がイヤよ
愚痴ってばかり
頼ってばかり
強がっただけの
嘘まみれの

辛い
そんなの口先だけ
きっとまだ
大して辛くない

人がどんなに言おうとも
私はただ
自分らしくあるだけ

長い間
世の中の
流行とか
基準に乱されて
失っていた
アイデンティティー
今取り戻すよ

温かな
言葉なら
なくてもきっと平気
耐えられるはずだよ
今ならきっと
強がりじゃなく
言い切れるわ
心の底から

強くなれる
嘘じゃない
私は今
両足でちゃんと立って
もう下ばっかり向いてる
私じゃない
うつむき加減の
私よ
さよなら

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2167y/

【詩集】かんりん

2011年12月13日03時45分発行